

## 行為連鎖のなかの敬体と常体\*

西阪 仰

### 1. はじめに

本稿の目的は、いわゆる「敬体」（「です・ます」調の表現）と「常体」の使い分けについて、いくつかの考察を行なうことにある。もちろん、これは、言語学の文章ではない。社会学の得意のテーマである（はずの）社会的行為の組織という観点から、敬体と常体の使用について考えたい。

社会的行為は、決して、真空状態において単発的に産出されるわけではない。それは、直接・間接の相互行為の網のなかにある。ここでは、最も局所的なところで、行為が織り成されていく現場を押さえよう。具体的な相互行為の録音・録画を分析することにより、行為の連鎖がどのように組織されるかを、丹念に見ていこう。そうすることにより、社会的行為が実際にどのように組織されているのか、そのやり方の、少なくとも一端が明らかにできると思うからだ。もちろん、行為は、いわゆる対面的相互行為を超えて「連鎖」するようにも思える。あるときに交わされた約束が守られないとき、約束が交わされる機会とは別の機会において、そのことに対する非難がなされる、という具合に。しかし、非難がなされるのはどのようにしてか。少し想像力を働かせてみよう。それは、そのときの対面的相互行為（あるいは電話、あるいはEメール）において、ある統制されたやり方で切り出されることになるにちがいない。あるいは、まずは、非難する相手にどのようにアクセスするか、出会いにおける最初の発言はどのように

なされるか、このようなことが、行為者自身の問題であるはずである。本稿が論じようとするのは、このような局所的な行為のあり方についてにはかならない。行為は、すべて局所的な機会において、その機会にふさわしい手続きにより、実現されざるをえないからだ。

以下、私がここ数年、集中的に検討しているいくつかのデータ（とくにTB, SDF と呼んでいるデータ）から、いくつかの断片を取り上げたい。そのほか、二三補足的なデータも参照しようと思う。

すでに述べたように、本稿が照準する現象は、行為の連鎖の組織における敬体の役割についてである。同じ相手に対して、敬体と常体が使い分けられることがある。これが本稿の照準する現象である。それは、次のような現象とは区別される（ただし、あとで何度か立ち返るように、本稿の現象と無関係ではない）。例えば、誰にも宛てられていないものとしてデザインされるような発話。次の断片は、サッカー・クラブの運営について、まとめ役の人たちが話し合っているところである。3人の参加者たちは、基本的に敬体を用いている<sup>1</sup>。

(1) [FC: 16: 02-05]

01 A:    ん。そうですね。(.) これは:  
02    → だから(0.4)会員:(1.2) あ 会員  
03    → じゃないや。(1.2) 存続(2.2) 難しい  
04        じ- 話になる.=か- 会員? (0.4)  
05        資か< (2.2) 存続の意志ですね。  
06 B:    ん:.

A の 02-03 行目の「あ 会員じゃないや」は、

02 行目で発した「会員」という表現の修復を開始している。それは、いわば「独り言」のように発せられている。このように、誰にも宛てられていない発話が、常体で産出されることは、しばしば観察できる。しかし、これは、私が本稿で取り上げたい現象ではない。

あるいは、宛先が変わることで、敬体から常体に発話様式が変わることもある。次の事例も、(1)と同じ相互行為から取られた断片である。Bは、Aと同じサッカー・クラブのメンバーでありながら、同時にAのクライアントでもあり、Aのことを「先生」と呼んでいる。Bは、Aに対して、基本的に敬体を用いている。ここでは、Aがサッカー・クラブのなかにも、飲み代と言って、3万円ぐらいすぐに出せる人たちもいると言ったのを受け、Bはその人たちのことを自分たちとは「桁が違う」と述べている。

(2) [FC: 18: 01-06]

01 A: あ:(.) ちよつと(.)のみ-  
02 n: 飲み代しとり三万だけど °<つつ  
03 たら>° わ(h):(h):(h):(h):(h)  
04 つつてすぐこんな(h)(ぐ)ら(h)  
05 (い)(h)集ま(h)るんだ(h)も(h)ん  
06 こ(h)の(h)しと(h)た(h)ち。  
07 hh [he(h)  
08 B: → [桁が違うね。三千円ぐらいにして  
09 → ほしい[ね.= (h) he (h) he (h) he (h)  
10 C: [haha

08-09 行目のBの発話では、常体が用いられている。確かに、01-07 行目のAの発話はBに宛てられている。が、08行で「桁が違うね」と言いながら、Bはいったん下を向き、すぐに顔を起しながらCのほうにその顔を向ける。つまり、Bのこの発話は、AではなくCに宛てられているように見える。実際、これにすぐに反応しているのはCである(10行目)。このように、発話の宛先が誰であるかに応じて、敬体・常体の使い分けがなされるような場合も、本稿の直接照準する現象ではない。

本稿は、あくまでも同じ宛先に対して敬体・

常体の使い分けがなされる場合に、焦点を当てていこうとするものである。

## 2. 参加の枠組

### 2.1. 同じ質問

そのようなことが劇的な形で起こる事例がある。次の断片は、Bを囲む数人の集まりから取られたものである。Bは、医学部に学ぶ留学生である。最初にCがBに将来の希望について質問し、それに対して、Bが整形外科に進みたいと答えている<sup>2</sup>。

(3) [整形外科]

01 C: 何をやりたいというのはまだ、決めて  
02 いないんですか?  
03 B: ん、一応、外科:の方へ行き[たい,=  
04 C: [外科。  
05 B: =整形外科( )  
(...)  
06 A: → 切り刻んだりするんですか?  
07 B: はい?  
08 A: → 切り刻んだりするの?  
09 B: いま:?  
10 A: や:(.) げ-(.) げか(.) 整形外科:  
11 だから。

05 行目でBが将来、整形外科を希望すると答えたのを受けて、こんどは06行目でAが質問をしている(「切り刻んだりするんですか?」)。それに対して、07行目でBは、「はい?」と聞き返している。そして、08行目でAは、自分の(06行目の)質問を繰り返す。

08 行目でAが自分の質問を繰り返すことの中に、AがBの聞き返し(「はい?」)をどう理解したかが示されている。つまり、Bは聞き取り上の問題を抱えていた、という理解がそこに示されている。というのも、Aは、08行目で質問を、内容的にとくに何かを付け加えたり、置き換えたりすることなく反復しているからだ。「切り刻んだりする」というまったく同じ表現が繰り返されることで、08行目の質問は、06行目の質問と、同じ質問(のやり直し)である

ことが明らかにされている。しかしながら、そのとき、発話の末尾が置き換えられる。つまり、06 行目においては敬体が用いられていたのに対し、08 行目においては常体が用いられている。

私たちは、この2つの質問を同じ質問として聞く。つまり、いずれも同じ相手(すなわちB)に宛てられたものとして聞く。にもかかわらず、敬体が常体が変わっている。ここにはどのような会話上の秩序があるのだろうか。

## 2.2. 宛先・向け先・傍観者

E. ゴッフマンの「参加の枠組」(Goffman, 1981)という概念の意義については、私もすでに幾度となく論じてきた(西阪, 2001 など。また Levinson, 1988 や Goodwin, 1984, 1986, 1995, 2007a, 2007b も参照のこと)。ゴッフマン自身は、個々の発話に対して多様な受け手がありうることを強調していた。つまり、1つの発話に対して、その発話が宛てられている受け手、宛てられてはいないけれども聞くことが公的に認められている受け手、単に漏れ聞く受け手など、多様な受け手がありうる。それぞれの発話に対する多様な受け手の布置のことを、ゴッフマンは「参加の枠組」と呼んだ。

この参加の枠組という考え方は、相互行為の秩序の、ある興味深い側面に気付かせてくれる。(3)の06行目と08行目の質問は、同じ受け手(B)に宛てられた同じ質問だった。しかしながら、宛先は同じであっても、他の受け手たちの参加身分が変化することがありうるはずだ。06行目と08行目の質問の組立の違いは、このことと関係しているように思う。確かに、いずれの発話(06行目と08行目)に対しても、他の参加者たちはすべて、その質問を宛てられていないがそれを聞くことは公的に認められている受け手であるにちがいない。一方、すべての参加者は、このBを囲む会への正規の参加者であるために、最初の(06行目の)質問を、しっ

かりと聞いていなければならないだろう。すべての参加者は、いつでも話し手になりうる者たちである。話し手になることができるためには、現在のやりとりがどのようなやりとりであるかを、常にわかっていなければならない。逆に言えば、すべての参加者が、そのような参加者であるかぎりにおいて、現在の発話は、すべての参加者が聞かなければならないものとして、デザインされることになる。06行目の質問において敬体が用いられているのは、このようなデザインが用いられているからにほかならない。

それに対して、08行目の質問は、Bによる聞き返しに対する答えとして産出されている。それは、Bによる聞き取りのトラブルに対して特別に対処された発話である。それはいわば、Bに対して「聞きそこなったあなたに特別に繰り返される」質問として、デザインされている。そのとき、他の受け手の参加身分はどのように記述できるだろうか。すべての参加者のうち、Bのみが日本語を第1言語とする者でないことも、考慮されるべきかもしれない。08行目の(繰り返された)質問の場合、B以外の受け手は、もはや、それをともに聞かなければならない者であるわけではない。もちろん、Aがそこでその質問をしていることは、他の受け手にも聞かれているし、そこで何が起きているかは、やはり他の受け手にはわかっていなければならない。しかし、彼らのためには、すでに語られたことであり、彼らは、その(08行目の)発話に対しては、いわば傍観者として参加することが期待されている。常体が用いられるということは、他の受け手たちに、傍観者という身分を与える1つの操作というべきだろう。

だから、06行目と07行目の質問は、ともにBが宛先であるとしても、他の受け手たちは、06行目の質問の場合には、その質問の向け先(宛先ではない)であるのに対して、08行目の質問に対しては傍観者となっている。敬体から

常体への移行は、たとえ宛先は変わらなくても、参加の枠組全体が変化したことと呼応していると言える。

こう考えると、まずは、本稿が扱わないと述べた(1)と(2)を含め、敬体から常体への移行は、参加の枠組の変化ということによって説明できるように思える。しかし、ことはそう単純ではなさそうだ。

### 3. 行為連鎖の組織

#### 3.1. 行為連鎖タイプと挿入連鎖

次の断片は、電話の会話から取られたものである。電話の会話だから、参加者は2人である。だから、敬体が用いられるときも、常体が用いられるときも、宛先は同じである。他に受け手はいない。だから、いま述べたよう参加の枠組による説明は、難しい。しかし、そこには際立った特徴が観察できる。(4)は、友人どうしの会話で、BがAに、待ち合わせの場所の変更を依頼するためにかけてきた電話の一部である。

(4) [TB 01:10-02:01]  
01 B: → だけど: 場所ちよつと: かえて  
02 → ほしいんですよ。  
03 A: °ひえ (hh)°  
04 B: え じゃないよ。え じゃあ。 .hh  
05 あの::上野だよ、ね、須藤ね::  
06 A: うん。  
07 B: → じゃあ アキバでどうですか。  
08 (.)  
09 A: アキバ:: アキバ アキバ アキバ  
10 なんでアキバ:-,  
11 B: ん、あの::: (.)ほら ((携帯電話の会社名))のさ::学割始めてんじゃん。  
12  
13 A: あん。  
14 B: そいで:: .hh 十二月ついたらから  
15 サービス開始: なんだ:- ろうけど:  
16 A: あん。  
17 B: なんか予約がどうこうとかいってん  
18 じゃない。  
19 A: ああ いってんね::.  
20 B: で あれって なに。普通の: .hh  
21 あの:: (.)<携帯本体を買ったとこ  
22 ろで> 予約とかもできるってこと?

23 (.)  
24 A: ん:::ん それは: やっぱ聞いたほう  
25 → がいいから、 んじゃあ 先に[そっち]=  
26 B: [nhhn ]  
27 A: → =やっつてしまい [ましょう。  
28 B: [あのさ: そう- ん。  
29 あの::: .hh パンフレット (0.6) と  
30 ゆうか まあ なに? まあ >パンフレッ  
31 トっていうのかな:.< ってゆうのを  
32 まあ.hh 生協いってばらばら見たん  
33 だけどそのへんのことまで書いてなく  
34 てさ:: .hh [hh ((鼻すすり))  
35 A: [ふん, ふん,  
36 B: ん だから まあ .hhh (.) とうゆうの  
37 も含めて秋葉原のほうが つごういい  
38 な::とか思って: (ね).  
39 A: → ああ、 いいすよ別に

この断片では、AもBも敬体を用いたり常体を用いたりしている(敬体が用いられている発話を矢印でマークした)。01-02行目で、まずBは、電話の用件を述べている。つまり、場所を変えてほしいという依頼のための電話であることを告げるが、しかし、そこでは、まだ具体的な場所は挙げられていない。その場所は、07行目で提案という形で述べられる。この一連のやりとりは、この提案という行為を軸とした「提案連鎖」とみなすことができるだろう。それは次のような意味においてである。

まずは、「連鎖」ということについて、少し補つとおこう。提案とは、行為タイプの名称である。「タイプ」というのは、一口に提案といつても、様々な提案がありうるからである。提案であれ、約束であれ、行為の名称は、行為タイプの名称である。一方、多くの行為タイプ(もちろん、すべての、ではない)は、2つの行為タイプが合わさって、行為連鎖タイプを構成する。例えば、質問と返答という行為タイプは、「質問-返答」という行為連鎖タイプを構成する(Sacks, 1992; Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974; Schegloff & Sacks, 1973; Schegloff, 2007)。この連鎖タイプは、いくつかの特徴を持つ。なによりも、2つ

の行為タイプから構成されること、これはいま述べた。第2に、この2つの行為タイプは、順序を持つ。返答は質問のあとに産出され、その逆はない。第3に、まさにタイプであるということの核心にかかわることだが、ある行為連鎖タイプの第1成分が産出されるならば、次の発言順番において、その同じ行為連鎖タイプの第2成分が産出されることが、一般的に期待できる。そして、第1成分が産出されたにもかかわらず、第2成分が産出されないならば、そこには、第2成分が産出されないということが、観察可能になる。

ところで、提案という行為タイプは、「提案—受諾もしくは拒否」という連鎖タイプの第1成分を構成する。すなわち、提案がなされるならば、その次の発言順番において、その提案の受諾もしくは拒否がなされることが、期待可能となる。ところが、(4)の場合、07行目で提案がなされたあと、次の順番、すなわち09-10行目では、提案連鎖の第2成分は産出されない。そのかわりに、「なんでアキバ」という理由を問う質問がなされている。じつは、このようなことは、よくある。行為連鎖タイプにとって重要なのは、第2成分が産出されるべき場所で、別の行為連鎖タイプの第1成分が産出される時、後者は、前者（そこに産出されるはずだった第2成分）と、必ず関連づけて聞かれるという点である。実際、09-10行目の間は、あるべき第2成分、すなわち、提案の受諾もしくは拒否のための、予備的な連鎖を開始するものと聞くことができる。その提案の理由いかんによって、それを受け入れるか拒否するかを決める、というわけである (Schegloff, 1972)。この連鎖はいわば、元の連鎖に挿入されている（つまり、元の連鎖の第1成分と第2成分の間に入り込んでいる）。このような挿入連鎖が、決して珍しいものでないという感を得るには、例えば、次の例を見てもらえばよいだろう。

(5) [TJG: 73-79]

- 01 A: 三日間またいじゃだめなのかな。  
02 B: ん、二泊三日(.)っていうこと?  
03 A: うん。  
04 B: ん、それでも別にかまわない

ここでは、01行目と04行目が1つの行為連鎖タイプ（提案—受諾）の2つの成分であり、その間に、別の行為連鎖タイプ（質問—返答）が入り込んでいる。そして、02行目の挿入連鎖の第1成分は、あくまでも来るべき、元の連鎖の第2成分のための準備として聞くことができる。

それだけではない。(4)の09-10の（提案の理由を問う）質問のあとに産出されるのは、質問の属する連鎖タイプの第2成分（すなわち返答）ではない。11-12行目の発話は、「じゃん」で終わることからも明らかなように、確認を求めている。つまり、ここでは、挿入連鎖にふたたび挿入連鎖が差し挟まれていることになる。11-12行目のBによる確認の求めに対して、Aは13行目で確認を与えている（「あん。」）。また、14-18行目でも、確認が求められており、それに対しては、19行目で確認が与えられる（「ああ、いってんね:。」）。この2つの確認連鎖は、09-10行目のAの（提案理由を尋ねる）質問にBが答えるための、なんらかの準備と聞くことができるだろう。

さらにそのあと、20-22行目でBは、携帯電話の学割サービスの予約について質問をしている。この質問の、行為連鎖上の意味も（当人たちにとって）きわめて明らかである。第1に、この質問に先立つ、質問者Bによる確認の求めは、この質問のための準備だったと聞くことができる。第2に、この質問に対するAの返答いかんによって、09-10行目のAの質問（提案理由を尋ねる質問）への返答が決まると、こうこの質問を聞くことが可能である。

### 3.2. 第2成分の先取り

いくらか錯綜しているので、少し整理しておこう。(5)のような単純な挿入連鎖は、次のように表わすことができるだろう(数字は、挿入連鎖の「深度」を表わす)。

A: 第1成分0(提案)  
B: 第1成分1(質問)  
A: 第2成分1(返答)  
B: 第2成分0(受諾)

それに準じて図式化するならば、(4)は次のように表わすことができるだろう(薄い文字の部分は、これから検討する部分で、(4)におけるやりとりの実際の展開を反映していない)。

B: 第1成分0(提案: 07行目)  
A: 第1成分1(質問: 09-10行目)  
B: 第1成分2(確認要求: 11-12行目)  
A: 第2成分2(確認供与: 13行目)  
B: 第1成分2(確認要求: 14-18行目)  
A: 第2成分2(確認供与: 19行目)  
B: 第1成分2(質問: 20-22行目)  
A: 第2成分2(返答)  
B: 第2成分1(返答)  
A: 第2成分0(受諾)

最初に注意しなければならないのは、(5)の場合、挿入連鎖の深度は1であったのに対し、(4)の場合は、2まで下がっている点である。さらに、深度が異なることにより、最も深い挿入連鎖の第2成分を産出するべき参加者と、元の連鎖の第2成分を産出するべき参加者が一致する点にも注意しよう。つまり、(5)の場合は、「第2成分1」を産出するべき者はAで、「第2成分0」を産出するべき者はBである。それに対し、(4)の場合、最も深い第2成分である「第2成分2」を産出するべき者と、元の連鎖の第2成分である「第2成分0」を産出するべき者は、ともにAである。

このように整理しておくならば、20-22行目のBの質問のあと、24-27行目でAが行なっていることが、見やすくなるだろう。このBの質

問は、次のような質問として聞かれていた。すでに述べたように、その返答いかんによって、Bがどのような提案理由を与えるか(すなわち、09-10行目のAの質問にどう答えるか)が変わってくるような、そういう質問だった。一方、この(20-22行目の)Bの質問に対する返答は、Aが与えるべきものである。つまり、Aは、当然、自分の与えるべき返答をすでに知っている。さらに、09-10行目の、提案理由についての質問は、それへの返答いかんで、Aが、Bの元の提案(07行目)を受諾するか拒否するかが決まるような、そういう質問だった。

さて、22行目の時点に戻ろう。いま、Aは、20-22行目のBの質問に対する自分の答えを知っている(24行目以降の発話から、それは「わからない」というものであることが明らかである)。さらに、その答えがBに返されたとき、それにもとづいてBが、自分の最初の質問(09-10行目)に対して、どのように返答するかも、予想できるかもしれない(つまり、もし答えが「わからない」であるならば、それを聞くためにアキバにまず行きたい、というような理由が返されることが、予想可能である)。そして、そのような提案理由が示されることがすでに明らかならば、自分が元の提案を受け入れるべきかどうかを、この時点で決めることができるはずである。

だから、(4)では、深度2の挿入連鎖第2成分を産出するための発言順番が、Aに回ってきたとき、Aは、その発言順番を利用して、その第2成分(第2成分2)を産出するかわりに、元の連鎖の第2成分(第2成分0)を産出することになる。これを図式化すれば次のようになる。

- B: 第1成分0 (提案: 07行目)
  - A: 第1成分1 (質問: 09-10行目)
  - B: 第1成分2 (確認要求: 11-12行目)
  - A: 第2成分2 (確認供与: 13行目)
  - B: 第1成分2 (確認要求: 14-18行目)
  - A: 第2成分2 (確認供与: 19行目)
  - B: 第1成分2 (質問: 20-22行目)
  - ~~A: 第2成分2 (返答)~~
  - ~~B: 第2成分1 (返答)~~
  - A: 第2成分0 (受諾: 24-27行目)
- 

つまり、深度2と深度1の挿入連鎖第2成分が飛び越されて、元の連鎖の第2成分が産出されているわけである。

このように見るならば、(4)でAとBが敬体を用いている連鎖上の位置は、かなりはつきりしている。つまり、元の連鎖の第1成分(「アキバでどうですか」という提案)と第2成分(「先にそっちやっちゃいましょう」という受諾)である。

### 3.3. 前方拡張と後続拡張

この提案連鎖は、前後に拡張されている。最初に後続拡張を見よう。24-27行目でAがBの提案を受け入れてしまったことによって、Bは提案理由を述べる機会を失った。ところが、面白いことに、Aが提案を受諾したその直後に、Bは提案理由と聞くことのできる発言を産出する(28-38行目)。どうして、ここで提案理由を述べる必要があったのか。もう提案が受け入れられているのだから、理由など述べる必要はないのではないか。しかし、私には、少なくとも1つ、やはり提案理由を述べたい合理的な理由があるように思う。07行目の提案自体が、いくらか唐突になされている(あるいは、唐突なものとしてデザインされている)点に注意しよう。このことは、提案の理由がいずれかの機会に語られることを適切にしているように思える。また、この提案が、もともと決まっていた約束(待ち合わせ場所)の変更の依頼に埋め込まれてい

る点にも注意しよう。いったん決まったことを変更することは、理由説明の必要なことである。実際、28-38行目でBは、この提案(もしくは依頼)に先立ってすでに自分で調べてみたと言っている。つまり、この提案もしくは依頼は、思いつきで出てきたものではなく、すでに自分の一定の努力(自分で問題解決しようとしたこと)にもとづいているというわけである<sup>3</sup>。

この位置で、提案理由が述べられるということは、行為連鎖の組織という点からは次のような意味を持つ。09-10行目のAの質問に対する返答がまだなされていないとき、28-38行目の、この提案理由の提示は、その返答(つまり、深度1の第2成分)として聞かれうる。とするならば、この返答の次に産出されるべきものは、元の連鎖の第2成分である。実際、39行目で、ふたたび元の提案の受諾(第2成分0)が産出されている。ここでも、0度の発言においてのみ、敬体が用いられている。

次に、07行目の提案の前方に目を向けよう。01-02行目においてBがまず電話の用件を語っていることは、すでに述べた。この発言が、この電話における、これ以降のやりとりを枠付けていることも、すでに示唆した。そして、ここでも敬体が用いられている。この用件の提示は、依頼の形式を取っている。が、それだけで完結した依頼になっていない(このこともすでに述べた)。つまり、場所をどこに変えてほしいのかが語られていない。03行目で、依頼は形式上拒否されるが、その拒否を拒絶して、Bは、具体的な提案へと進んでいく。さて、04-05行目で、Bは、Aがその待ち合わせのあとに赴く場所の確認を求めている。この確認の求めは、来るべき、具体的な場所の提案と関連付けて聞くことができるだろう。つまり、06行目でA(須藤)の行き先(上野)の確認が与えられたとき、具体的な待ち合わせ場所として「アキバ」が提示される。このとき、04-06行目のやりとりは、

あくまでも、来るべき場所の提案のための準備として聞かれるだろう。そのような準備のやりとりにおいては、やはり常体が用いられている。

### 3.4. まとめ

以上から、次のことが言える。行為の連鎖が組織されるとき、基底になる（核になる）行為連鎖タイプにおいて敬体が用いられるのに対して、そのための準備となるような連鎖においては、常体が用いられることがある。(4)の詳細な分析をとおして見てきたように、これは決して偶然ではないように見える。そのような目で見てみるならば、(3)における常体も、挿入連鎖において用いられていることに気付くことができよう。ただし、(3)の元の質問（「切り刻んだりするんですか?」）は最終的に答えられることはない。09行目で、同じ深度の挿入連鎖第1成分が産出され（「いま:??」）、続いて（10-11行目）それに対する第2成分が産出されたあと、別の参加者がまったく関係のない話題を開始してしまう。しかし、それでも、基底の連鎖においては敬体が用いられているのに対し、挿入連鎖、もしくは準備のための連鎖においては、同じ参加者に宛てられているにもかかわらず、常体が用いられる。さらに、(1)において常体が用いられている部分も、いわば挿入的な部分である点に注意してよいだろう。(2)も、じつは、このやりとり自体が、現在の相互行為の当面の課題、すなわち、サッカー・クラブの運営会議、とくに懇親会などいかに金をかけずに行なうかの話し合いの、いわば「わき道」にある。

敬体から常体への移行は、当面の課題（その課題が、インタビューであれ、新たな待ち合わせ場所の提案であれ）の本筋から、なんらかの形で（その本筋を完遂するための準備としてであれ、余談としての冗談としてであれ）退くことを際立たせるための、相互行為的な手段の1つと言えるかもしれない。もちろん、このよう

な大づかみな定式を提示することが本稿の目的では、必ずしもない。むしろ、敬体・常体の使い分けが、実際に、参加の枠組や行為連鎖を組織するうえで、どのように用いられているかということこそが、重要である。一方、敬体・常体の使い分けは、現在の発話が当面の課題の本筋のうえにあるのか、そこから退いたところにあるのかを示すものとして利用可能であること、このことは、相互行為参加者によって志向されている。この点を、最後に明らかにしておこう。

## 4. 本筋であること：誰の区別か

### 4.1. 物語を語ること

次に検討するのは、3人の男性が食事をしながら、会話をしているところから取られた断片である（この断片については、西阪、1995、1997、2003も参照のこと）。長い断片だが、紙幅の都合上、焦点を当てる部分だけを、順次提示していくことにしたい。Nは、ある学会について、その学会がかつては「年寄りばっか」だったと述べ、その学会で最初に発表したときのことを、語り始める。

(6) [SFD #3]  
01 N: → >いや いや< ぼくはほんとにね  
02 → びっくりしたこと あんですよ。  
03(? : ふ:::ん)  
04 N: あの::: 富山に赴任した1年目に:  
05(? : )  
06 N: あの 慶応の湯河原さんから突然電話  
07 があつて:=  
08 A: =入りなさいって?  
09 (.)  
10 N: いや発表しろって。

Nは、最初に「びっくりしたことがある」という報告を行なっている。しかし、この報告も、これだけでは、何の報告だかわからない。つまり、そのびっくりしたことが何であるのかは、次に語られること、このことが主張されている。この発言は、Sacks (1974)が「物語の前置き」にほかならない。これから、(次の発言順番で受

け手により阻止されないかぎり) 物語が語られること、その物語はびっくりしたことが語られたところで終わること、などが、ここに提示され、聞き手に対し、いわば物語を聞くための枠組を提示している。この枠組提示の発言には、ふたたび敬体が用いられている。

実際の物語は、04 行目でまず時間が特定されるところから始まる。08 行目で、聞き手の1人である A が物語の途中に入り込んできて、N の話の先取りを試みる。それに対し、09 行目で N は、この先取りを拒否する。この 09 行目の発言は、物語を語るという当面の課題に照らしたとき、本筋からずれている。そして、そこでは常体(と聞きうる言い方)が用いられている。

続いて、N は、その電話の内容、すなわち、もともと発表する予定だった人が急用で学会に出席することができなくなり、その代わりに発表するよう依頼があったことを語り、そして結局、関西で研究発表をすることになったことを語っていく。

(7) [SFD #3]

01 N: と:つ然来て: (.) で >もうしよう  
02 がないなと思って< (1.6) で::  
03 → 関西でやったんですけども。  
04 A: ん:::ん。  
05 N: <そのときに:> (1.2) ぼくはてっ  
06 きり堂本雄一郎さんていうのは  
07 死んでるかと思ってたのね?

結局、関西で報告するはめになり、わざわざ(「しようがないなと思って」) 出かけたということは、時系列的に語られる出来事の1つである。この点をまずは押さえておこう。また、ここで時間と場所が語り終えられ、山場に向けた「舞台設定」がなされたと聞くことができる。そして、この舞台設定のための発言では、やはり敬体が用いられている。

続く 05-07 行目の発言は、物語の時系列の外にあるコンテキスト情報を提示している。確かに、そう思っていたのは、そのときにほかな

らないだろうが、まず関西で報告をし、そしてそのあとそう思ったわけではない。あくまでも、これからびっくりしたことを語るための、補助的な情報を与えるものである。そして、この補助的な情報のための発話では、常体が用いられている。

この断片において、本稿の主題との関連で最も興味深い箇所は、(7)の直後にある。が、まずは、物語の終局を確認しておこう。

(8) [SFD #3]

01 N: 'んで: tch tch てつきり堂本さんて:  
02 死んでると思ってたら: tch tch  
03 報告した後: (.) あの ひよこつと:  
04 (.) 来て: tche なんかいいろいろ(.)  
05 tche 言いはじて、(.)tche これの-  
06 これを- 報告まとめたほうがいいです  
07 よって言って (.)tche あ::: どうも  
08 ありがとう (h) ござい(h)ます(h)て  
09 いったら: 私 堂本ですけども (hh)  
10 F: hh hehehhhhhhhh .hhh hehehh hh  
11 N: → もう: ね (h) [びっくりしましたよ=  
12 F: [hehe  
13 =(とにかく.)  
14 F: hehe [hhh  
15 A: [ああ ああ  
16 N: てつきり::: こう: 死んでる::: (.)  
17 かと 思っていた人が突然 目の前に  
18 現れて。

01-09 行目において、この物語の山場が語られる。それが山場であることは、台詞が直接引用されることにより、出来事の記述の「粒度」が高くなっていること (Schegloff, 2000)、および、笑いが発話の合間に差し挟まれることにより、笑うべきこと(面白いこと、すなわち語るに値すること)が語られつつあることが示されること、これらによって、際立たせられている。09 行目で死んでいたと思っていた当人による名乗り(「私 堂本ですけれども」)が演じられた直後、聞き手の1人である F は、大きく笑う。F は、そのことにより、その物語が終わったという理解を示すとともに、その物語にふさわしいやり方で、その物語を受け止める。そ

のあと、11行目で、最初の「物語の前置き」にちょうど呼応するようにして、物語を終える「まとめ」が産出される。「前置き」と「まとめ」により、物語はいわば前後から枠付けられる。そして、この後方からの枠付けでも、敬体が用いられている。

以上のように、物語を語るという当面の課題が与えられたとき、その課題の本筋を際立たせるためにも、敬体と常体の区別は相互行為的な手段として用いられているように見える。このような区別が、本当に相互行為参加者本人たちの区別であるのかどうか。このことを次に確認したい。

#### 4.2. 相互行為組織のための資源

(7)の直後に立ち返ろう。ここでは、いくら奇妙なことが起きている。(7)では、Nは、件の学会に呼ばれたとき、堂本雄一郎はもう死んでいると思っていたと語っていた。それをAは「ああ:」と受け止める。

(9) [SFD #3]

01 A: ああ::  
02 N: >あのいわゆる< 日本社会学史がっ k-  
03 日本社会学説史っていうの(h)で(hh)  
04 (.)こう(h) 堂 [本 雄 一] 郎=  
05 A: [なるほど.]  
06 =とかさ:  
07 A: ええ  
08 N: まあ山海さんは知っていたけど:  
09 A: ああ はあ はあ  
10 N: → 出てくるじゃないすか。  
11 A: 山海さ(h)ん [も出て(くるんで)=  
12 F: [ehhe .h hhhhh  
12 A: =>山海さんぼく生きてるとき驚いた  
13 なでも<

02-10行目のNの語り方は、いくつかの点において錯綜している。が、まずは、A自身の理解を見ておくのがよい。Nは、とりあえず、堂本雄一郎が出てくると述べている。これだけ聞くならば、死んでいると思っていた堂本雄一郎が、「しよがないと思って」行った学会に出て

くる、という話と聞くことも可能である。それどころか、これは「びっくりしたこと」と聞くこともできる。であるならば、ここは、物語の終局と聞いてもよい場所である。実際、Aはそのように聞いている。11-13行目のAの発言から、Aは、Nの物語を、まさにそのように聞いたことがわかる。Aは、11行目で、「山海(h)さんも出て」くるということを新たな情報として受け止めている。つまり、山海もその学会に出てくると聞いている。そう聞いたうえで、自分にも同じような経験があることを、語り始めている。Aだけではない。もう1人の聞き手であるFも、10行目の直後に大きく笑い始めている。つまり、Fも、10行目の末尾を、現在の物語の終わりとみなしている。

しかしながら、このAの経験談(山海が生きていると知って驚いたときの話)が一区切りついたところで、Nは、自分の物語の続きを語り始める。それが(8)である。(8)の16-18行目ではっきり語られるように、Nの「びっくりしたこと」とは、単に堂本が生きていることを知って驚いたということではない。死んでいると思っていた人が「突然目の前に現われ」たことこそ、「びっくりしたこと」だったのだ。

じつは、(9)の02-10行目のNの発言を丁寧に見返すならば、AとFは、重要な点において誤解をしていたことがわかる。ここで、Nが言おうとしていたことは、堂本雄一郎が学会に出てくるということではなく、「社会学説史」に出てくるということだった。いくつかの錯綜が、この誤解を引き起こしていることは見やすい。例えば、03行目で「日本社会学説史」と言うまえに、「日本社会学史学会」と言い間違え、あわてて訂正している。さらに、04-06行目で「堂本雄一郎とかさ:」と言い、10行目で「出てくる」と言うあいだに、日本の社会学史上の超絶級の大家社会学者である山海の名に言及し(つまり、山海が生きていたことは知っていたと述

べ), そのことにより, 主語(「堂本雄一郎」)と述語(「出てくる」)が引き離されてしまった。

一方, Nがここで, 堂本が学説史に出てくるということを語る理由は, 相互行為のそれまでの展開において, 十分ある。(7)の06行目で初めて堂本雄一郎に言及するが, そのあとAは「ああ:」と反応するだけで, 堂本を認識できているかどうか, 明らかでない。堂本が誰だかわかっているかいないかによって, 堂本が目の前に現われたという物語の「オチ」の持つ意味は, かなり変わってくるだろう。だから, もし聞き手が堂本を認識できないのであれば, 堂本のことをそれまで聞いたことがなくても「オチ」が十分衝撃的となるような, そのための予備的情報を与えてやればよい。堂本が学説史に出てくる(つまり, 「歴史的人物」である)というのは, まさにそのような予備的情報にほかならない。

さて, この予備的情報は, 先に述べたようないくつかの錯綜を含んでいた。しかし, この予備的情報は, 十分動機付けられた, 合理的理由を伴うものである以上, その錯綜だけで, あのような誤解を生じるとは, むしろ, 考えにくい。誤解の性質は, 次の点において本質的である。つまり, 予備的な情報を, 物語の本筋と, しかも山場と取り違えている。私には, この取り違えを導いた決定的な要因は, 10行目の「出てくるじゃいすか。」で敬体が用いられていること

## 参考文献

Goffman, E. (1981). On footing. In *Forms of Talk* (pp. 124-159). Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Goodwin, C. (1984). Notes on story structure and the organization of participation. In M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action* (pp. 225-246). Cambridge: Cambridge University Press, .

にあるように思える。敬体により, この発言があたかも本筋を構成するかのようになってしまっているのである。

ともあれ, Aの物語による中断のあと, Nがふたたび自分の物語を続行しようとするとき, Nは, (7)の05-07行目の発言の趣旨を繰り返す(「てっきり堂本さんて死んでると思ってた」[(8)の01-02行目])。つまり, (9)の02行目以降は, いわば削除されてしまっている。

## 5. 結語

本稿では, 敬体と常体の使い分けが, 単に参加者間の親密度のような, 相互行為そのものにとって外在的な様々な属性に依存するだけではないこと, むしろ, 相互行為の組織そのものための重要な資源として, 当人たちにとって利用可能なものであることを, 示してきた。もちろん, 参加者間の関係いかんによっては, ある参加者は敬体しか使わないというようなこともあるだろうし, 逆に, 常体しか使わないということもあるだろう。なにもこのようなことを否定しようとはしていない。重要なのは, それでも, 敬体と常体の区別が, 相互行為の組織の1つの手段であるとするならば, それがどのような手段でありうるのかを, 見失わないようにすること, これである。

Goodwin, C. (1986). Audience diversity, participation and interpretation.

*Text*, 6(3), 283-316.

Goodwin, C. (1995). Seeing in depth.

*Social Studies of Science*, 25, 237-74.

Goodwin, C. (2007a). Participation, stance, and affect in the Organization of Activities. *Discourse and Society*, 18(1), 53-73.

Goodwin, C. (2007b). Interactive footing. In E. Holt & R. Clift (Eds.), *Reporting*

- Talk: Reported Speech in Interaction* (pp. 16-46). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. & Robinson, J. (2006). Accounting for the visit: Giving reasons for seeking medical care. In J. Heritage & D. Maynard (Eds.), *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 48-85). Cambridge: Cambridge University Press.
- Halkowski, T. Realizing the illness: Patients' Narratives of symptom discovery. In J. Heritage & D. Maynard (Eds.), *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients* (pp. 86-114). Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S. C. (1988). Putting linguistics on a proper footing: explorations in Goffman's concepts of participation. In P. Drew & A. Wootton (eds.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order* (pp. 161-227). Cambridge: Cambridge University Press.
- 西阪 仰 (1995). 「サックスのアイデア②: 物語を語ること」『月刊言語』24 (8).
- 西阪 仰 (1997). 「会話分析になにができるか: 『社会秩序の問題』をめぐって」奥村隆編『社会学になにができるか』(pp. 115-154) 八千代出版.
- 西阪 仰 (2001). 『心と行為』岩波書店.
- 西阪 仰 (2003). 「相互行為としての『伝聞』」『月刊言語』32 (7), 62-69.
- Sacks, H. (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In R. Bauman & J. Sherzer (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking* (pp. 135-144). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A Simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Schegloff, E. A. (1972). Notes on a conversational practice: Formulating place. In D. N. Sudnow (Ed.), *Studies in Social Interaction* (pp. 75-119). New York: The Free Press.
- Schegloff, E. A. (2007). On granularity. *Annual Review of Sociology*, 26, 715-720
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer for Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8 (4), 289-327. (北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学』, pp. 175-241, マルジュ社, 1989.)

---

\* この論考は、2006 年度明治学院大学社会学部 附属研究所一般プロジェクト「会話分析の可能性」の報告である。

<sup>1</sup> 断片の引用において用いられている記号の意味は、次の URL を参照のこと。また引用中の太字は、分析にかかわる部分を際立たせるための

---

ものである。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>

<sup>2</sup> このデータは吉川友子氏の集めたものである。もともとはビデオで撮られたものだが、私の手元には、トランスクリプトしかない。ただ、ビデオは、丁寧にを見せていただいた。この箇所の引用を許してくださった吉川氏に記して感謝したい。

<sup>3</sup> 一次医療の初回診察において、患者が医師に対し、しばしば自分が、医師を訪ねるまえにいかにか努力をしたかなどを語ることは、このことが観察されている (Heritage & Robinson, 2006; Halkowsky, 2006)。医師を訪ねることも、理由説明が適切であるような行為の1つである。